

岩

題字 浜名一雄

創刊号 昭和49年10月1日

発行者 群馬県山岳連盟
〒371 群馬県前橋市大手町1-1-1
TEL (0272)23-1111 内線519-520
群馬県観光課内
編集者 群馬岳連編集委員会
責任者 太田忠行
印刷所 (株)高橋印刷
定価 1部50円



あいさつ

発刊に際して

群馬岳連会長 浜名一雄

高きを求める魂の喜び、未知への探求、自己の限界への挑戦、とそれらを山に求める若者達によって、県内各地に登山グループの誕生を見るに至ったのは、昭和四五年頃から思うのですが、昭和六六年上越線が水上駅まで開通し、谷川岳が脚光をあびるや俄かにその結成は助長されたかの感がありました。然し乍ら遭難者の続出によって魔の山のレッテルをはられ、水上町の苦悩を招くことになりました。

ま、社会的責任を持たねばなりません。それは自らの計画を行動の中から己れを探り、己れに打ち、己れを認めると共に、数多くの未組織同好者に何を呼びかけるべきかの責任を自覚せねばなりません。もともと山岳景観は一或いは幾つかの条件が、その真価の裏付となつて人を引付けるものであります。例えば名称、山容、成因、植生、動物、溪谷、河川等様々なものがあります。

●至仏山(二二三八)―山名もよく、おろからで柔かい曲線を持ち親しみ易い山。
●草津白根(二二六二)―怪異卓偉で骨立無庸の山。
●武尊山(二二五八)―珍らしい山名で、長大な障壁をめぐらす山。
●皇海山(二二四四)―奇異な山名で、気品のある山(こうしん)。
●谷川岳(一九六三)―日本三大岩場の一と言われ、世界一の遭難者を出している魔の山。
●赤城山(二八二八)―温かく抱容してくれ、雄大な裾野を持つ山。関東野に直結する最高峰。

私共は先輩が残した利根水源探勝の素晴らしい記録を汚すことなきや、また悲しい結果ではあつたかと思つた。私共は先賢が残した利根水源探勝の素晴らしい記録を汚すことなきや、また悲しい結果ではあつたかと思つた。私共は先賢が残した利根水源探勝の素晴らしい記録を汚すことなきや、また悲しい結果ではあつたかと思つた。

今年度の行事計画については、すでにその大半を消化してしまいましたが、計画の内容についてお知らせ致します。行事の主体となるものは、次の様なものです。
一、山の美化運動、谷川岳・尾瀬地域のゴミ集め、美化パトロールの実施など。
二、遭難防止活動、岩登り、水雪技術講習、冬山合宿の検討会などが行なわれています。
三、遭難救助活動は、県岳連救助隊の活動が主となりますが、去る五月には一般会員を対象とした、救助訓練も実施されました。
四、登山行事に関しては、一般参加を対象とした、春・冬二回のオリエンテーリングの行事があり、春の行事は盛会でした。
五、海外登山研究活動。研究会が主体となつて現在、波に乗つたところで活発に進められています。以上のような内容ですが、具体的な行事の実施計画は、次の通りです。

- 七月 谷川岳美化運動 7・7
全国遭難対協 水上11・12
岩登り講習会 7・21
海外登山研究会
八月 尾瀬美化運動 8・3・4
関東地区登山大会 東京
市民登山教室と映画の会
九月 市民登山教室
前橋・高崎・太田
海外研究会 赤城15・16
十月 指導員検定会(後期)
団体・奥入 10・20・25
救助隊訓練
十一月 ヒンズークシュ
カラコルム研究会
一二月 冬山合宿検討会
一月 日山協海外研究会
冬山合宿報告会
二月 水壁講習会 2・2
三月 救助隊訓練(谷川岳)3・2
雪上オリエンテーリング

嶺呂のいわれ

嶺呂とは、万葉集の中に出てくる言葉で、嶺は、山々・峰々の意味で、呂は親愛・感動の念をこめて使う接尾語です。万葉集、上毛野国の歌の中に、「久呂保の嶺呂(赤城山)とか、伊香保の嶺呂(榛名山)などという風に使用されておられ、群馬岳連の会報の名にふさわしいと思います。命名者は浜名会長です。



この間日本の登山界も科学的技術的進歩をとり世界的地歩をかため、幾多の業績を残しました。群馬岳連も二十七年の年輪を重ねたい

●浅間山(二五四二)―活火山、高原に大きく蟠踞して世界的牙状熔岩を持つている山
●四阿山(二二三三)―山名にも興味があるが、しみじみとした情趣豊かな山

●日本最大の降水量を誇る利根の水源地域など、揚言できる内容を持つものがあります。
群馬岳連はこうした歴史と環境の中で、過去の活動も何れかと言えば地味でしたが、漸く前々岳

六月 救助隊訓練 6・9
実行委解散DNV 6・17
オリエンテーリング 6・23
総会 6・30

指導員会の方針

指導委員長 田中成幸

遠い昔から、私達日本人の祖先は山登りをしてきた。それは「スポート」としての山登りではなく、山岳信仰からきたものでありスポーツ登山として現在の形になったのは、極く近年のことである。

山岳信仰としての登山のリーダーたちを先達といったのは衆知の通りだが彼等は体験から考え出した山登りに必要な技術を口から口へ先輩から後輩へ直接伝えてきた。

現代では登山者は指導者や、数多くの指導者から理論や知識を学ぶことが出来るが、これらは体で消化して初めて身に付くものである。だが登山技術というものは、極めて範囲が広く地図の読み方から、気象の判断、山で生活するためのすべての技術、果ては人間関係まで含まれてくる。

そのすべてについてより広く知るためには個々に学ぶより大勢の経験者達の力を結集したら良い結果が得られるものと思う。

その点谷川岳や妙義・尾瀬・これらの山々をホームグラウンドとして育った私達群馬県の指導者は恵まれていると云える。

仲間の中には専門家の達人が大勢いるからだ。遭難救助技術の専門家も地域の山に精通している者も自然保護や学術的な方面の専門家、又登山技術や用具の研究をしている人達も沢山いる。



遭難対策部活動方針

遭難対策部委員 加藤 藤夫

山は美しい自然の姿を示して、我々をやさしくつつみ、精神と肉体的疲れをとりのぞき明日への新しい活力を与えてくれる。しかし、山は美しい自然の姿を示して、大きな問題は毎年多くのかんしい事故が発生していることである。我々はその現実を良くみつめ、発生原因を徹底的に追求する事が大切である。そして登山の正しい知識と技術を身につけ、万全な準備をおこなうことなく無理のない楽しい登山をおこなうよう指導していくことが我々に与えられた使命でもあると思う。

常任理事の会務執行の分担決まる

本年六月二〇日開催の岳連総会で選任された常任理事の会務執行の分担が次のとおり決定した。

- 理事 長井井謙 郎 (伊勢崎)
- 事務 長谷山真 (太田) 大井清 (前橋)
- 企 画 柴田義孝 (ミヤマ) 布施正昭 (高体連) 山根利夫 (東邦車鈴)
- 海外 登山小暮勝義 (境町) 坪井信一 (松井田)
- 事務 局吉田茂作・長井澄夫

右分担に基づいて本年度の岳連の会務を執行しますので各加盟団体において協力をお願いします。

編 集 大田忠行 (独峰) 川辺柳 (境町)

写真説明 特製の背負袋(田中成幸氏考案)で負傷者を背負い、携帯ウインチによる吊上げ、吊降しの訓練を行なっているところ。

昭和四九年度 女子登山指導者 研修会の報告

昭和三十九年七月、四日、五日(六日開)

会場 文部省登山研修所(実技は剣沢野営場をベースに剣沢、別山)

期日 昭和三十九年七月、四日、五日(六日開)

〇人工岩場の利用による実技。岩登り基礎技術、隔時登攀、確保。

〇入山準備、入山食調達。

〇文登研前進基地へ入山。剣沢テント設置、雪上歩行技術、班別研究、講師との話し合い。

〇雪上技術(長次郎谷)歩行、アイゼンワーク、カットイング、滑落停止、確保。

〇研究講義「女子登山指導者に対する諸問題」。

〇別山、右稜ルート登攀、二パーティに別れる。

〇夜の班別ミーティング「内容の反省と感想」。

〇下山、研修会の感想文を指定の用紙に書き提出、解散。

感想、講演、講義に於いては、時間も時間が欲しかった事。この様な時でない有名な講師から直接聞かせるチャンスがないからである。実技においては新しい技術の取獲は、研修会というより講習会的だった。皆初めてのことで消極的であった様に思う。行動に敏捷性と流動性がなく、時間のロスが多かったように思う。二回三回と続けて行けば良いと思います。毎年、誰かに出てもらいたいです。なお、参加者全体の交流が二十八日夜強風雨に依り出来なかったのが残念でした。(阪本明子)

に防ぐ予防対策にあると思えます。そして予防対策の第一は指導教育にあります。そこで遭難対策部としては、技術の向上を目標とし机上教育、夏の岩場、冬の雪上における技術の習得、知識の向上、器具の取扱、等、カリキュラムを組んで遭難予防に全力を投入しております。

四九年度行事計画

四月十九日 四九年度救助隊員結団式

五月十九日 一般を対象とした救助訓練(岩場、器具の扱い方、ザイル、ザック、七、登攀の喜びと危険性、ヤッケ等を利用しての〇講演、負傷者の背負い方、タ〇講義・実習「救急法」、小森シカカの作り方等)

六月九日 谷川岳一の倉沢、(搬出技術の向上、ワイヤ二、止血法、三角布の使用法、器具の扱い方) 三、運搬方法。

十月十三日 谷川岳、(岩場技術の向上) 四、パンティストッキングの利用法。

三月二日 谷川岳(雪崩、雪に對する技術の向上) 〇班別打合せ、入山食の献立、研修内容の計画表作成。

〇講義「地図と地形」

全国遭難対策協議会、二五日

〇講義「地図と地形」

全国遭難対策協議講習 五百沢智也 二万五千分の一の地図について、スライドによる水河

の說明。

〇人工岩場の利用による実技。岩登り基礎技術、隔時登攀、確保。

〇入山準備、入山食調達。

〇文登研前進基地へ入山。剣沢テント設置、雪上歩行技術、班別研究、講師との話し合い。

〇雪上技術(長次郎谷)歩行、アイゼンワーク、カットイング、滑落停止、確保。

〇研究講義「女子登山指導者に対する諸問題」。

〇別山、右稜ルート登攀、二パーティに別れる。

〇夜の班別ミーティング「内容の反省と感想」。

〇下山、研修会の感想文を指定の用紙に書き提出、解散。

感想、講演、講義に於いては、時間も時間が欲しかった事。この様な時でない有名な講師から直接聞かせるチャンスがないからである。実技においては新しい技術の取獲は、研修会というより講習会的だった。皆初めてのことで消極的であった様に思う。行動に敏捷性と流動性がなく、時間のロスが多かったように思う。二回三回と続けて行けば良いと思います。毎年、誰かに出てもらいたいです。なお、参加者全体の交流が二十八日夜強風雨に依り出来なかったのが残念でした。(阪本明子)

第三回日本山岳救助指導者研修会報告

期日 昭和四十九年六月十日

場所 文部省登山研究所(立山)

目的 山岳遭難救助活動の指導的立場にある者に対し、遭難救助に関する知識と実技について研修を行ない、指導者としての資質向上を図る。

参加者 講師四名・実技リーダー九名・研修生五十名。
群馬 新井邦光(高崎)
岐阜 櫻井進(太田)

内容 六月十日 講師 遠藤登「遭難対策上の問題点」
現在の遭難実態は、年間約五六百件発生し、死者は二百人にも及んでいる。また三十才以下の者が九十%を占め、登山の基本・考え、思想・ルール、スポーツ登山としての多くの問題を残している。日山協では次の二項目に力を入れていく。一、予防・正しい登山技術・指導の充実。二、救助活動・体制・研修。その他、リーダーの義務や最近の登山者傾向についても講義があった。

講師 芳野超夫
「山岳通信の諸問題」
遭難した場合の通信・連絡のあり方を説明・特に通信機の活用と問題点を話した。
市民バンド二七MHz 八波
業務用 一六・九五八MHz(音W) 一六・九七六MHz
その他 二七MHz 〇・一W
講義の後、室内で応用と実技訓練

全国統一波二六・九七六MHz
山岳救助専用二六・七〇八MHz
富山・長野・岐阜 一W
「人工岩場を利用した救助と搬出」
映画会「岩登り基本編」日山協
「救助法」剣岳の実例模様
六月一日 講義
「ヘリコプターによる救助法」

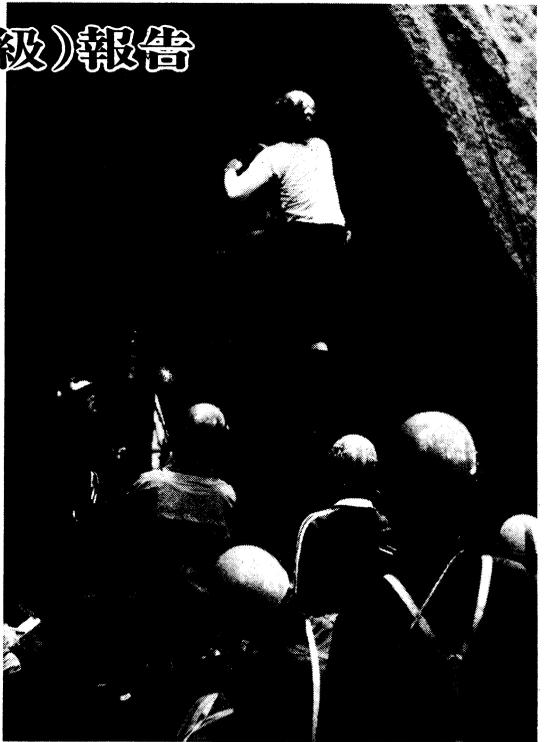
講師 伊藤忠夫
富山・剣岳の救助実例を紹介
長野・北アルプスの実例 水田宏
「ヘリの問題に関して長野では、民間機の利用を一番と考えている。自衛隊の活用については、一、民間機がない場合。二、吊り上げの場合。三、大量遭難の場合であり、それ以外はほとんど民間機を利用している。北アルプスでは、使用回数も多く、費用も多額である。一回の遭難で、春三十万、夏二八万、冬五十万円位である。各県のヘリの状況
宮城(警察で活用)
兵庫(消防・都市公害が主体)
北海道(道警・地区割りあて、しかし自衛隊が主体)
神奈川(消防一、警察二)
愛媛(警察)

「ヘリコプターによる実技訓練
自衛隊機二〇四D式機を活用し、①ヘリポートの作成・②誘導の仕方・③搬出方の訓練を実施。
「救急法」 沢木勇二
一般救急法・負傷者の搬出(ザイル・ザック・タンカ・袋)・室内講義の後、室内で応用と実技訓練

を実施した。
六月二日 実技 水田宏
「人工岩場を利用した救助と搬出」
警察関係者が半数おり、技術の差があり、四班に分けて行なう。
一、懸垂下降。二、V字確保。
三、懸垂による引き降し。四、滑車による引上げ。五、ウインチによる引上げ、引降し。六、ワイヤーケーブル。七、スノーボードの岩場下降。八、その他。
六月三・四日 実技
「雪上における搬出」
立山に登り、雷鳥沢で、雪上における搬出を行なう。主にスノーボードの引上げ、引降し及びスキータンカの作成。
その他 参加して、実技訓練等は、身についていたというより、参考になったという程度だと思ふ。群馬岳連の救助レベルは、全国に比較すれば、ひるむ事はない。一番良かつた事は、全国各地から山の仲間が集まり、各県の実態や問題点を知り、種々な特色を生かした地域社会に合った救助や登山を行っていることを知ったことであつた。

岩登り講習会(上級)報告

期日 7月21日
場所 榛名山硯岩



アプミ操作中の受講生(須田栄一氏撮影)

特別講師 小暮勝義 (RCCI)

参加者

宮崎光広、阿部源(天間々) 諏訪ふさ江(登高会) 小泉俊夫 高井寿郎、広瀬芳弘(前橋) 飯塚実、石川忍(桐生) 下平昌弘 塚越寛(倉瀬) 須田栄一、木暮寛、和田伸夫、武井博(むすび) 船藤茂、石原重喜(独峰) 宮崎勉、小林清、谷弘行、岡庭清(ミヤマ) 渋谷滋夫、内田光男 山鹿良一、柴田実(富士重工) 以上二十四名

講習内容

用具の使用法、携行法、(二)ザイル、アプミの操作、(三)宙吊りからの脱出、(四)確保、(五)下降、等の実技講習を行った。

全国遭対協議会開かる

昭和四十九年度の全国遭難対策協議会は、七月一日・二日の二日間、わたり水上町のホテル水上館で行われました。当日は長雨による国鉄ダイヤの混乱等にもかかわらず、北は北海道から南は九州まで文字どおり全国からの参加者を見、横有恒先生の「登山について」の特別講演があった後、文部省、気象庁、郵政省、日山協等からの講師を迎えて山岳遭難の原因究明、遭難防止のための具体的施策等について熱心な討議が行われ多大な成果をあげて終ることができました。協議内容については次のとおり、課別別、領域別に分け、

- 課題別研究協議
 - 第一部会 雪崩遭難事故の防止について
 - 第二部会 遭難事故と通信網について
 - 第三部会 登山者の健康管理について
 - 第四部会 事故を起さない登山計画の作成について
- 領域別研究協議
 - 第一分科会(高等学校関係) 高等学校における登山指導とその指導体制のあり方について
 - 第二分科会(大学関係)

大学における登山計画と指導及びその指導体制の確立について。
第三分科会(一般関係) 山岳遭難対策組織のあり方について。
第四分科会(遭難救助関係) 山岳遭難救助技術の高度化とその対策について。
なお、当日の出席者は(二三)名で、本県は主に常任理事が出席しました。



